

① 雉子手 (太鼓)

(謡い)

(笛)

(天平鉦)

★ 子どもたちの実演 じつえん

平成二十一年十一月に開催された上十川小学校の学習発

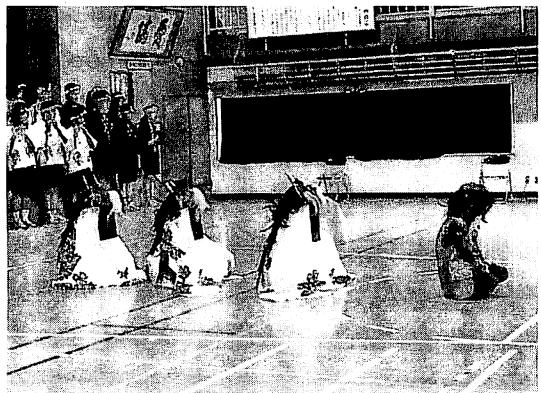
表会で、子どもたちの獅子踊が公開されました。保護者や保存会の方々と一緒に、筆者も参観させていただきました。

会場一杯に奏でられる雉子の響き、オガ獅子に導かれて踊る獅子頭の動き、一獅子競い ↓ 山掛け ↓ 音頭 ↓ 街道渡り ↓ 拝み ↓ 音頭 ↓ 女で進行していきました。

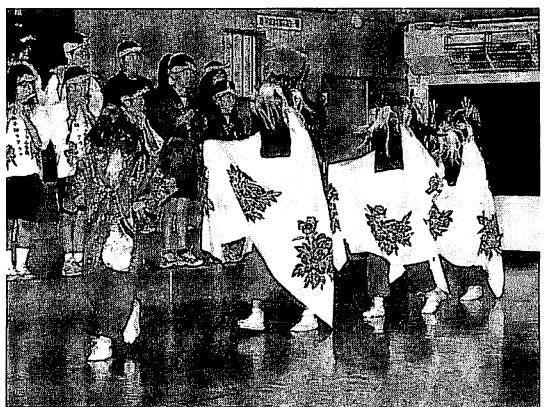
雉子に乗つて踊るしぐさの変化につれて、鋭くそして柔らかに動くマクの揺らめきが、獅子頭の息吹のように感じました。

雉子手・踊り手、ほか諸役をそれぞれ担当した子どもたちが、一体となつて演じ進めた見事な獅子踊でした。参観した人たちは心動かされたこととと思います。

笛の担当者は縦笛を用いて演奏。オガ獅子の翁の面、牡獅子牝獅子の獅子頭やマクなども子どもに合わせた大きさ、というところにも、真剣な工夫が感じられました。



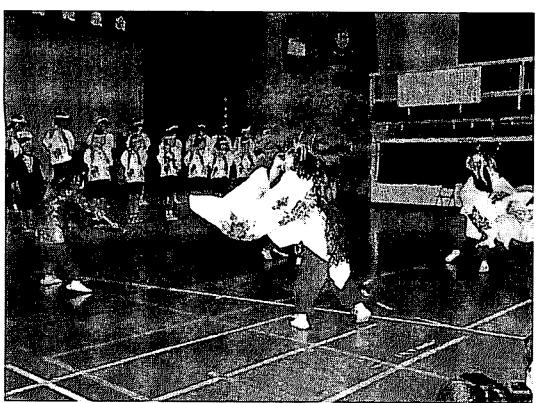
③ 「^{おが}拝み」の場面 (頭を動かし周囲に礼拝。) ② 「街道渡り」の場面 (オガ獅子の先導で前進。)



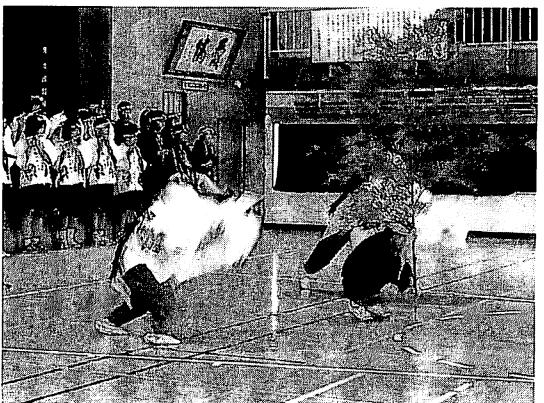
⑤ 「女獅子の競い」の場面(2)



④ 「^{うじしきそ}女獅子競い」の場面(1)



⑦ 「^{やまか}山掛け」の場面(2)



⑥ 「^{やまか}山掛け」の場面(1)



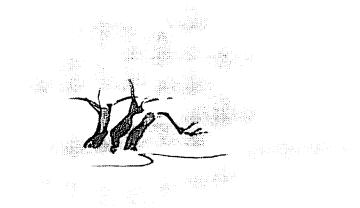
⑧ 「山掛け」の場面(3)

みなさんも分つて いるように、ふだんの生活のなかで大人の人たちは自分の仕事を持つています。そして、子どもは子どもの生活のリズムがあることと思 います。

一緒に活動できる時間を作り、獅子踊の練習が続けれ てきたのは、指導してくれる保存会の人々や練習に努 める子どもたちに、相当な熱意と努力があつたからだと 思います。そして、保護者の皆様が、地元の伝統芸能に 対して深い理解を持つて応援していることが大きな支え になつて いると思 いました。

それをはつきりと受け止めることができた機会でもありました。

地域の伝統芸能として継続されて いる「上十川獅子踊」が、このよ うな歩みを大事にしながら、今後とも発展していか れることを願つています。



八 地域に伝わるお地蔵様のお話

真澄は、次の日（二日）に黒石に行こうとしましたが、雪が降り積もつたので、たどつてきた里のほうに向かつて戻りました。
そして、二双子の村に入り、館山養泊という医者の家に泊まりました。
そして、五日の昼頃黒石へ向かいました。

◆ 真澄の紀行文

寛政七年（一七九五）十一月五日

五日、この頃、雪が益々降つて道もつかないので、二三日館山さんの家に泊まつた。今日の昼頃から黒石へ行こうと出発した。

左の田中村の方に出ると、遠く広い雪の上に人も馬も絶えず行き交う一筋の道があつたので、迷う心配も無く歩いていった。夕飯を炊いているらしい煙が立ち上るので見て進んで行くと、やがて野際という村についた。道を少しばかり進むと株梗木という村の家並みの軒が続いて、黒石の里についた。昔見ていなかつたところを、このような雪の中で見るのも良い

ことであろう、と独り言を言いながら高田惠民という医者の家を訪ねた。
そして、懐かしく語り合い、そこに泊まつた。



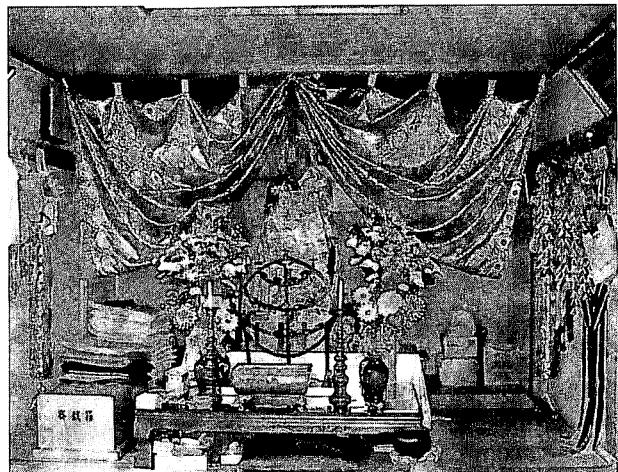
五日の日真澄は、二双子の集落しゅうらくを出て黒石の里に向かいました。真澄の紀行文には、途中の田中たなか。野際のぎわ。株梗木くみのきなど集落の名前も記されています。田中。野際周辺の下目内澤と株梗木のお地蔵様について、とても珍しいお話を伝わっていますのでお知らせします。

(一) 糸なわをかけられたお地蔵様じぞう — 下目内澤村しもめないざわむら

黒石市目内澤の地区に地蔵堂じぞうどうがあります。その中には、人の身長と同じくらい大きな一体のお地蔵様が置かれています。このお地蔵様は「目内澤地蔵めないざわじぞう」と呼ばれています。

実はこのお地蔵様は、日露戦争にちろせんそう（一九〇四年～一九〇五年）があつた時代に、警察けいさつに糸なわをかけられて、捕とらえられてしましました。

どうして、お地蔵様がそのようにされたのか不思議に思いませんか。



当時の目内澤村では、日露戦争の始まつた頃まで、戦争に行つた人が一人もいませんでした。どんなに体格がよくても、だれ一人として兵隊として合格する人がいなかつたのです。自分が兵隊になりたいと希望しても、あてが外れて、合格しなかつたそうです。

これは、きっと村外れにあるお地蔵様のご利益だ、といううわきが広がりました。

ほかの村々では、兵隊に行く年齢になると、軍隊に入れられて、遠く満州（中国東北部）という地へ送られた人がたくさんいました。一人でも兵隊に行つた人がいる村では、「村の誇り」を誇りに思ひ、「バンザイ！」と喜んで叫んでいたそうです。

ちょうど日露戦争が始まつた頃は、日本は戦争で連戦連勝を重ね、金州城（中国の東北地区で、日露戦争の激戦地）を始め、攻めていくところで大勝利をおさめっていました。そのため、日本のいたる所がお祝いムードに包まれ、昼は旗をかざした行列・夜はちようちん行列が行われ、兵隊を出した村では、わが村の勝利のように喜びました。

しかし、やがて戦争が激しくなり、弘前の部隊（第八師団）が最前線で戦うことになりました。兵隊を出した家ではとても心配になりました。

ある家では、一人しかいない子どもを兵隊に出したり、農作業の働き手の子どもを兵隊に出したりして大変苦労しました。自分の子どもを兵隊に出した親は、いつ戦死するかもしれないという心配で押しつぶされそうになりました。

そして、できることなら兵隊に出したくない、という気持ちを持つ人も出てきました。戦争に行つた兵隊も、勇んで行つた人もあれば複雑な気持ちで行つた人もあつたのではないか。

弘前の部隊で、勇敢に活躍して表彰された人はたくさんいました。けれども、同時に戦死した人もたくさん出てきたために、戦争に対する恐怖はしだいに大きくなりました。特に、戦争に出て行つた人の家族にとつては、とても不安でした。そして、どうにかして家族を兵隊としてとられたくない、と思う人も出てきました。

しかし、その頃は兵隊に行くことが國家の義務でしたので、堂々と反対したり、断つたりすることができますませんでした。人の力ではどうにもできず、神仏に頼むしかありませんでした。

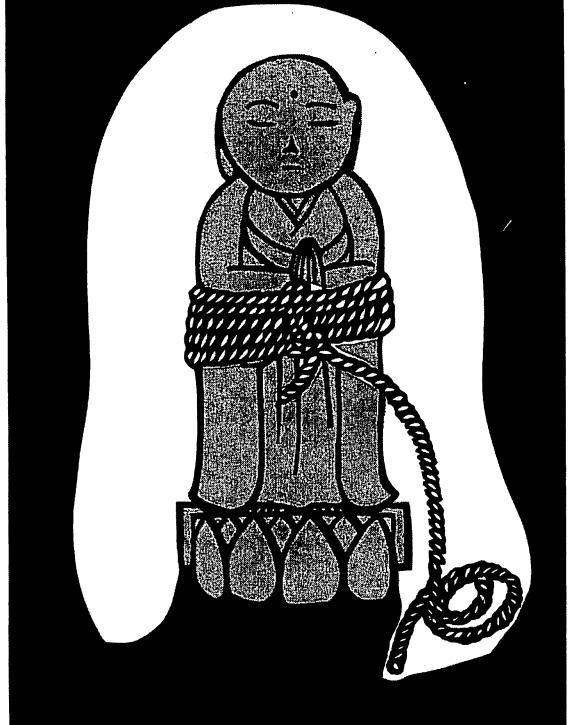
「目内澤のお地蔵様のおかげで、目内澤の人は兵隊にはとられない。もしとられたとしても、戦地せんちに行くことはない。だから、戦死せんしはしない。」という評判ひょうばんが広きました。

それを伝え聞いた大勢の人々は、目内澤の村はずれに置かれているお地蔵様のところへお参りにかけつけ、いつも信者しんじゃで一杯いっぱいでした。お地蔵様の周りはいつも線香せんこうの煙けむりが絶えませんでした。

そのことが世間の評判ひょうばんになるに連れて、国の役所やくしょにも知れました。「これはただ事ではない。徴兵制ちようへいせい（軍隊に行かせる國の法律）に逆らう者が目内澤

にいる。このお地蔵様は、もとは中国の冠かんむりを被かぶつたお坊さんだつたとしても、頭を丸めて袈裟けさをかけ日本に住んでいるのだから日本の国民だ。日本にいて日本の法律に従わないのは、日本の国民でない。けしからんことだ。」

というわけで、警察署けいさつしょではこのままではいけないと考えました。そこで、警官けいがんを差し向けて、お地蔵様に縄をかけて捕とらえました。



驚いたのは、兵隊に行くことを避けたいと

願つていた人たちでした。お地蔵様が捕えられたというので、ご利益が無くなつてしまつたと人々は思いました。そのことも広く知れ渡りました。
それからというもの、目内澤村からは立派な兵隊が出るようになつたそ
うです。

しばらくして、このお地蔵様の縄はとかれましたが、近くの村々から蔑まれるようになりました。たとえば、お盆に相撲大会が開かれると、勝負に負けた若者たちがお地蔵様にやつあたりをして、悪さをしました。

「人を兵隊にやらない、心ないお地蔵様だ。ひとつこらしめてやれ。」

と、お地蔵様を転がしたり回したりしました。石でできているお地蔵様なので、鼻が欠けたり、口に傷きずがついたりしました。しかし、お地蔵様は何も言いません。…………。しばらくはそのようないたずらが続きました。

やがて、そのような悪さをすることが怖こわくなり、お地蔵様にいたずらをする人も無くなりました。地蔵堂の前を誰も通らなくなつたそうです。
戦争のために大変な目にあつた「縄をかけられたお地蔵様」のお話でした。

※日露戦争——明治三十七年（一九〇四）二月頃より明治三十八年（一九〇五）九月頃

まで、日本とロシアが朝鮮と南満州（中国東北）の支配しばいをめぐって戦つた戦争。

(二)

嫁

をも

らつた

お地蔵様

——

株梗木村

——

梗木村

——

村

黒石村株梗木のぐみのきお地蔵様は、株梗木ぐみのきに来てから長い年月を重ねていまし
たが、いまだに独身です。こけが生えるまで村のためにがんばつていても、
村はそれに、ぼつんと一人ぼつちでいます。

お坊さんは、明治時代に入るとお嫁さんをもらうことを許されましたが、
お地蔵様はそうはいきません。今どきのように自由に結婚ができるわけでは
ありません。

にぎやかな盆踊りが済むと、村は静かになりましたが、お地蔵様は祠ほこら
(お地蔵様が入っているお堂のどうような小屋。ひば)にじつとしています。お地蔵様は、
「火鉢もないし、火箸ひばし一本もない、味気あじけない世の中だ」と一人なげいてい
ました。

お地蔵様はいろいろ考えた末に、とてもよい案を思いつきました。それ
は、寝ている信者の夢の中に現れて気持ちを伝えれば、イダコの語かたりを聞
く集まりの時にでも、みんなに話が伝わるであろう。そうすれば、希望が
叶えられるに違いないということでした。

※イダコ——死後の世界と交信をして、亡くなつた人の気持ちを話すと言われる人。

昔は、イダコが語る亡くなつた人の言葉を聞くため、近所の人たちが集まり

を設けることがあつた。

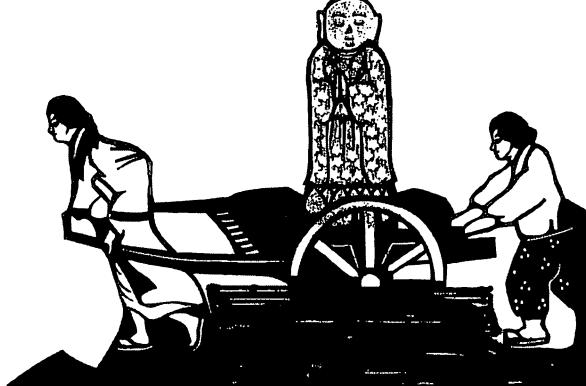
そして、ある夜、お地蔵様は村の信者の佐左衛門という人の夢の中に現れて、自分の思いを伝えました。ちょうど佐左衛門の家でイダコの語りを聞く集まりがあつたので、佐左衛門はお地蔵様がさびしい思いをしていることをみんなに伝えました。集まつていた村の人たち全員が、「それは尤もだであ。」「さびしへあよ。」と、お嫁さんになるお地蔵様を一體造つて、そばに置くことに決めました。

お地蔵様はとても喜びました。「石でできているこの体だが、もし、豆腐のように柔らかくなつても、お嫁さんを大事にする。」と誓いました。

そこで、村中の女性の人たちがお金を出し合つて、黒石の山形町にある石屋に嫁地蔵の制作をお願いしました。

いよいよ嫁地蔵が出来上がつたという知らせを受けると、村で使つてゐる農業用の手車（人力用の小さな荷車。）を引き出し、長い白木綿の引き綱をそれに結わえて嫁地蔵を迎えに行きました。

とても華やかな衣装を着た石の嫁地蔵は、多くの女性に引かれて石屋を出ました。そして、手車を御輿のようにして念佛を唱え





ながら町々を通り、真剣に嫁入り行列を進めました。

村はずれの祠ほこらも新しく飾かざり付けられていました。待つている地蔵様じぞうじょうも村の人たちも、何もかも新しい気分きぶんで一杯になりました。

嫁入り行列よめいが祠ほこらに着くと、地蔵の開眼じぞうのかいげん供養くよう（仏像など造つくったとき、お坊ぼうさんがそれを供養くようし、魂たましいを入れる儀式ぎしき。）と共に盛大な結婚式けっこんしきがあげられ、お祭りのようになりました。村もいつそう明るくなつたことでしょう。

これは、大正八年（一九一九）三月十五

日のことだそうです。

株梗木くわうこうのお地蔵様じぞうじょうが結婚けつこんしてからといふものは、四方しほうの村々や町々へも流行りゅうこうし、ほかのお地蔵様もまねるようになりました。

嫁よめをもらつたお地蔵様には、やがて、もう一体いつたいの子どものお地蔵さんまで置かれるようになり、誠に芽出度つたいことと伝えられています。

九 法眼寺の梵鐘

※梵鐘——お寺で、鐘樓に下げる、撞木（突く棒）で突き鳴らす鐘・釣鐘。

◆ 真澄の紀行文

寛政七年（一七九五）十一月七日

七日、この里（黒石の里）の紫雲山來迎寺の庭に、花山院忠長卿が植えられたという松がある。昨日今日と大雪が続いたので、一層見どころがあると思い行つてみた。しめ縄を引いて閉じてある門の脇から入つてみると、四方八方に広がつた松の枝葉が、雪を乗せて下に臥せているようになつていた。

寛政七年（一七九五）十一月八日①

八日、温泉（ぬるゆ）の温泉も見たいし、中野山の雪も心が引かれるから、さあ見に行こう、と高田惠民の家を出た。

町はずれの山形（現在の黒石市山形町）といふ所に、宝嚴山法眼寺といふ黄檗宗の寺があつた。享保の昔（一七二〇～一七三〇年頃）、廬山（ろさん）といふ尊い禪師が、法眼寺で用いる大きな釣鐘（つりがね）を武藏（むさし）（江戸・現在の東京方面）で鑄造（ちゅうぞう）させた。

※黄檗宗—承応三年（一六五四）、中国の明の時代に日本に来た

隱元隆琦いんげんりゅうきという禅師ぜんじ

が開いた宗派。山城国宇治やましろのくにうじ（京都府宇治市）の黄檗山万福寺おうばくさんまんぶくじを本山とした。

隱元禅師は、日本に「インゲン豆」を伝えた人と言われ人々に親しまれて

いる。

※禪師ぜんじ—深い知識ちしきとすぐれた精神せいしんを持つて立派な僧侶そうりょのこと。

※鑄造ちゅうぞう—金属きんぞくを熱あつして溶とかし、型かたに流し込み、それを冷ひやしてかためる。という

方法で目的の物を作る「金属加工法」。

※陸奥国むつのかくに—十三頁の「陸奥」みちのくと、八十二頁の「昔の国名」さきのくにをご覧ください。

完成した釣鐘かんせいを、陸奥国むつのかくにへ船はで運ぶ途中は、その釣鐘ちんばつを積んだ船が大波ゆくえを受けて沈没ちんぼつし釣鐘ゆくえも行方が分からなくなってしまった。

廬山禪師ろざんぜんじは、自分の心からの願いもこれで空しくなつてしまつたと力を

落し、それから間もなく亡くなつてしまつた。

それから五十年たつて、廬山禪師の五十年忌ごじゅうねんき（亡くなつてから五十年過ぎた人ひとを祈る法要ほうよう）を行つ年のことだつた。

常陸國鹿島郡上幡木村の下浜ひたちのくにかしまぐんうえはまたまといふ所で、漁師りょうしたちが地引き網じびをしてい
た。海から網を引いたところ、海藻かいそうやさまざまな小貝こい貝などがびつしり付ついていた。

た不思議な物がかかつてきた。

※常陸國——江戸時代、水戸徳川家の領地で、現在の茨城県。

これは何だろうかと、付いていた海藻や貝類などを斧で碎いて削り落してみると、それが釣鐘だつたので漁師たちは驚いてしまつた。これはどこかの鐘なのか、いつ海に落としたのだろうか、とみんなが寄り集まつて調べてみた。そしたら、陸奥國の津軽黒石の寺などと刻まれてあつた。

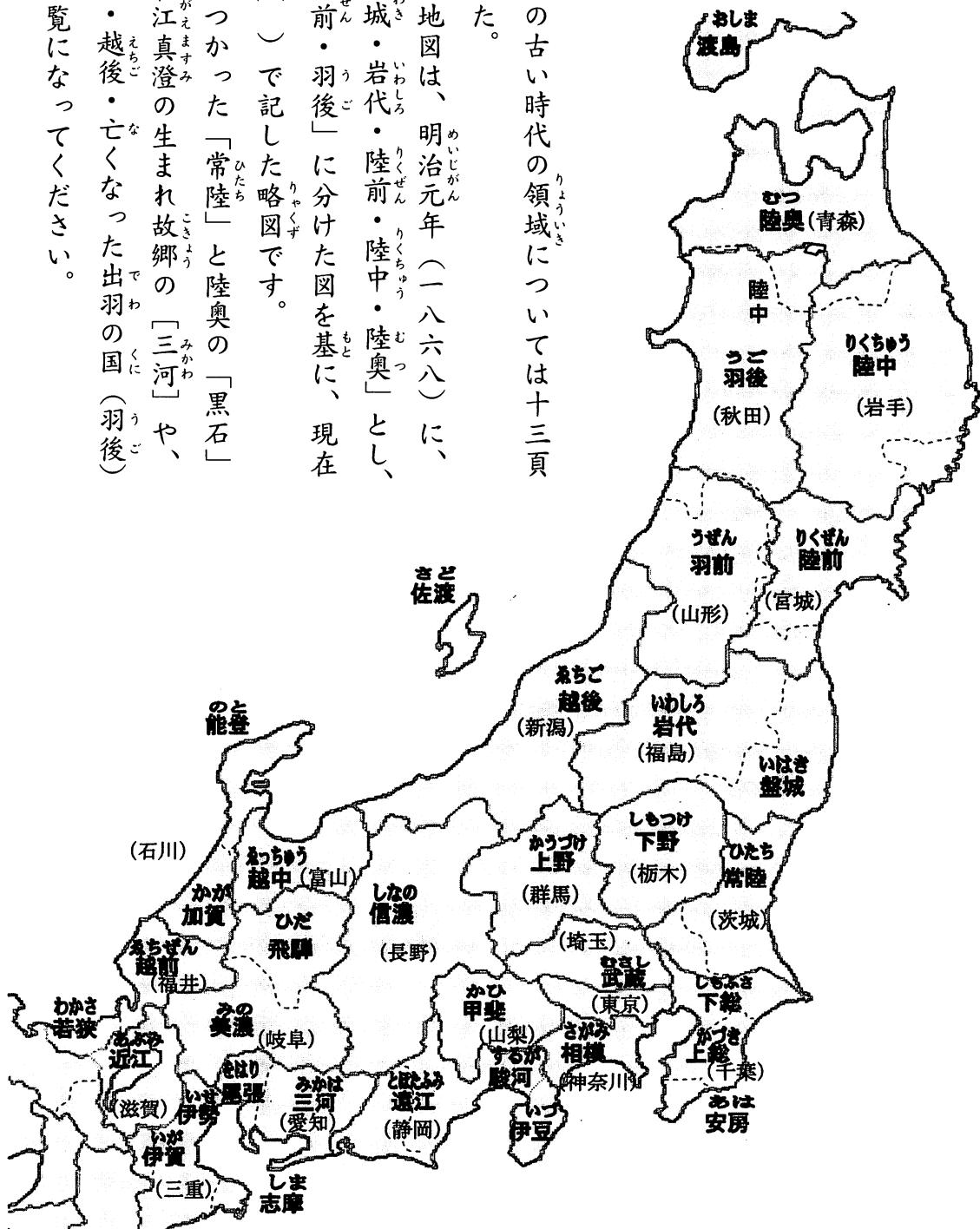
そこで、船主の重兵衛という人が水戸の藩公（水戸藩の殿様）に申し出て、その鐘を積んでこの津軽の国青森の港に入つたのが安永の末（一七八〇年頃）のことだといふ。

廬山和尚の尊い恵みが、この時にこそ世に現れたのだということで、この話を聞いた人は誰でも、津軽の人はもちろん、遠くからの旅人や修行者などがこの寺の鐘を見に訪れた。そして、このように不思議なことに驚き、尊ぶ思いを深くしたといわれる。

寺にはそれまで鳴らしていた釣鐘があつたが、それは同じ宗派の温泉の寺に掛けて、海から上がつてきた釣鐘は、すばらしい鐘楼を建てて今も吊つてゐる。

それを見ようと、雪を踏み分けてやや登つていき、大鐘を見ると……

- 「陸奥」の古い時代の領域については十三頁に載せました。
- 掲載した地図は、明治元年（一八六八）に、陸奥を「磐城・岩代・陸前・陸中・陸奥」とし、出羽を「羽前・羽後」に分けた図を基に、現在の県名を（）で記した略図です。
- 梵鐘が見つかった「常陸」と陸奥の「黒石」の位置、菅江真澄の生まれ故郷の「三河」や、巡った信濃・越後・亡くなつた出羽の国（羽後）なども、ご覧になつてください。



昔の国名

……という刻銘（刻まれた文字や文）が鐘の周囲に書き巡らされていた。

海に沈没した物が、波と潮の流れに引かれて遠くまで移動し別の浦（入り江・海辺）に行つていたなどということは、そんなには珍しいことではない。しかし、願いをもつた禅師の五十年忌を行おうとした年に、この大きな鐘が海の底から上がつたということは、世の中に例のないことであろう。この大鐘が朝夕に突かれて鳴る音を、重なつて生えている深い苔の下で聞いている廬山禪師も、さぞかしうれしいと思つていることであろう。

法の師の その名も高くこの寺の

鐘と共にや世にひびくらん

(一) 現在の法眼寺の梵鐘

菅江真澄が書いた梵鐘の不思議な出来事については、真澄がその当時自分で分かつたことを基にして述べた内容だと思います。

法眼寺第十三代住職の野呂徹宗さんが書いた「法眼寺」という本や「津軽黄檗禪刹記」という黄檗宗のことを書いた本を読んでみますと、菅江真澄が紀行文で述べた梵鐘に関わって、およそ次の内容が述べられていてます。

「享保八年（一七二三）、武州（武藏・現在の東京辺り）で作つた大鐘を、船で運搬している途中、海難にあい大鐘は海底に沈んでしまつた。ところが、安永八年（一七七九）四月八日に、常陸国（現在の茨城県）鹿島郡上幡村の海上で、十郎兵衛という漁師によつて引き上げられた。そのことは、水戸藩より津軽藩の江戸屋敷の方に連絡が入り、安永八年（一七七九）の八月にこちらの寺（法眼寺）に送られて着いた。海中に沈むこと五十六年、言葉では言い表せないほどの不思議なつながりである。……法眼寺には、この大鐘の初音（打ち鳴らす最初の音色）の時、武士・農民・町人など、身分の上下に関係なく大勢の人々が集まつた。

黒石藩家老の境形右衛門もおいでになつた。この大鐘の初の音色は、何とも例えようもないほど美しさで天にも地にも響きわたり、人々の感激の声がしばらく止まなかつた。

これより九日の供養（お供え物を捧げる行事）があり、日々大勢の人々が集まつた。」

人々の梵鐘に寄せていた深い思い、賑わいの状況が浮かんてくるような感じがします。

★

棟方志功さんが寄贈した現在の梵鐘

しょうろうどう

しょうろうどう

法眼寺の境内には、梵鐘がつるされている鐘樓堂があります。この鐘樓堂は、延享三年（一七四六）に黒石津軽家や信者の寄付によつて建てられました。

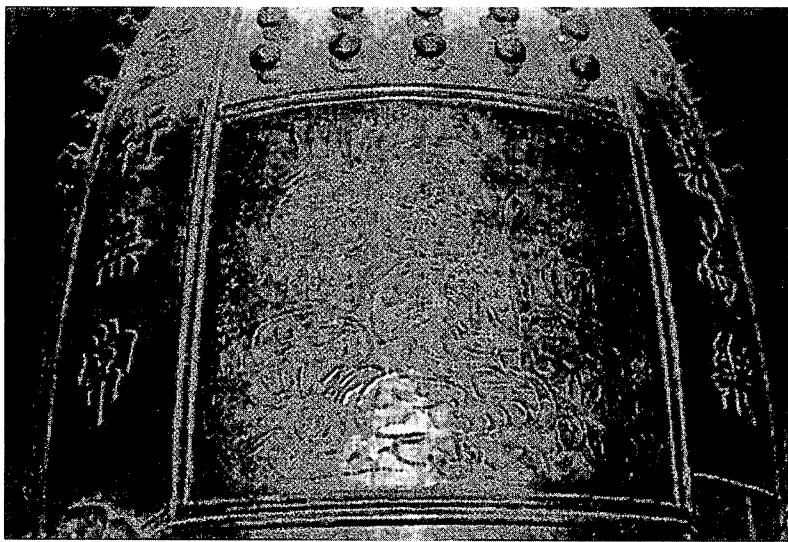
お話の中に出でてくる梵鐘は、この鐘樓堂につるされていましたが、文久三年（一八六三）九月と明治二年（一八六九）五月に起こった大火事のとき、半鐘の代わりに激しく打ち鳴らしたためにひびが入り、用いることが出来なくなつてしましました。

法眼寺に梵鐘のないときもありました。しかし、昭和三十二年（一九五七）に棟方志功さんという方が梵鐘を寄付されました。

棟方志功さんは、世界的に名前を知られている青森県出身の版画家です。「法眼」という法位を頂いていましたから、それと法眼寺という寺の名前が同じであつたことや、梵鐘が法眼寺に納まつた不思



法眼寺の「鐘樓堂」



鐘楼堂に吊るされている「梵鐘」



棟方志功の仏画

議な出来事などにとても感動し、梵鐘を寄付してくれられたということでした。梵鐘を鑄造するとき、自ら描いた「三尊佛」の絵も寄せてくださったので、梵鐘にはそれが刻まれています。それが現在の梵鐘です。

そのことを聞いた信徒の方々も喜んで助力し、棟方さんが寄付された梵鐘を鐘楼堂に納めたと言われています。



法眼寺の「本堂」

(二) 法眼寺の本堂・鐘樓堂 | 県重宝
法眼寺は、現在黒石市山形町にある黄檗宗のお寺ですが、お寺は最初温湯にありました。勢州阿坂(三重県)出身の南宋元頓といふ和尚によつて、延宝七年(一六七九)に開かれました。

元禄四年(一六九一)に、黒石三代領主政兜公(政兜公とも呼ばれています。)の命によつて温湯から現在の山形町に移り、次の年(一六九二)には、黒石領(藩)主の祈願所となり伽藍(寺院の建物)が造られました。

南宋元頓という和尚が法眼寺の初代住職(お寺のことを、まとめて率いていく代表者)です。紹介したお話の中出てくる盧山禪師は、盧山淨泰という法眼寺二代目の住職です。現在建つてある法眼寺の本堂は、明和三

年（一七六六）正月の大地震で壊れた後に、明和六年（一七六九）に仮本堂として再び建てられた建築物です。とても長い歴史を持つています。

本堂も鐘樓堂も、県内では珍しい「唐風造り（中国ふうの建て方）」の歴史的な建造物として、「県重宝」に指定されています。

大正四、五年（一九一六）には、北海道の松前藩主の菩提寺であつた経堂寺が移されたため、松前藩主の位牌も安置されています。

（法眼寺鐘樓堂一棟「県重宝」 指定 昭和五十三年八月二十四日）

（法眼寺本堂一棟「県重宝」 指定 平成五年四月十六日）

法眼寺境内には、そのほか山門・開山堂・砂踏みなど、黒石市で指定した文化財が数多くあります。

◆ 真澄の紀行文

寛政七年（一七九五）十一月八日②

左手（左の方向）に福民という家並みを見ていくと、牡丹平という村があつた。昔ここにその花が咲いていたのだろうか。雪はこぼれ落ちるように降るし、遠くのほうは暗かつた。

積もる雪で枝がしなっている木々の間から、煙がわずかに見える花巻村

という所を、たたずんで見ていると、空が晴れて春のようになつた。

花巻に着いた。昔、牡丹平を大杭村といい、この花巻を小杭村といつた。

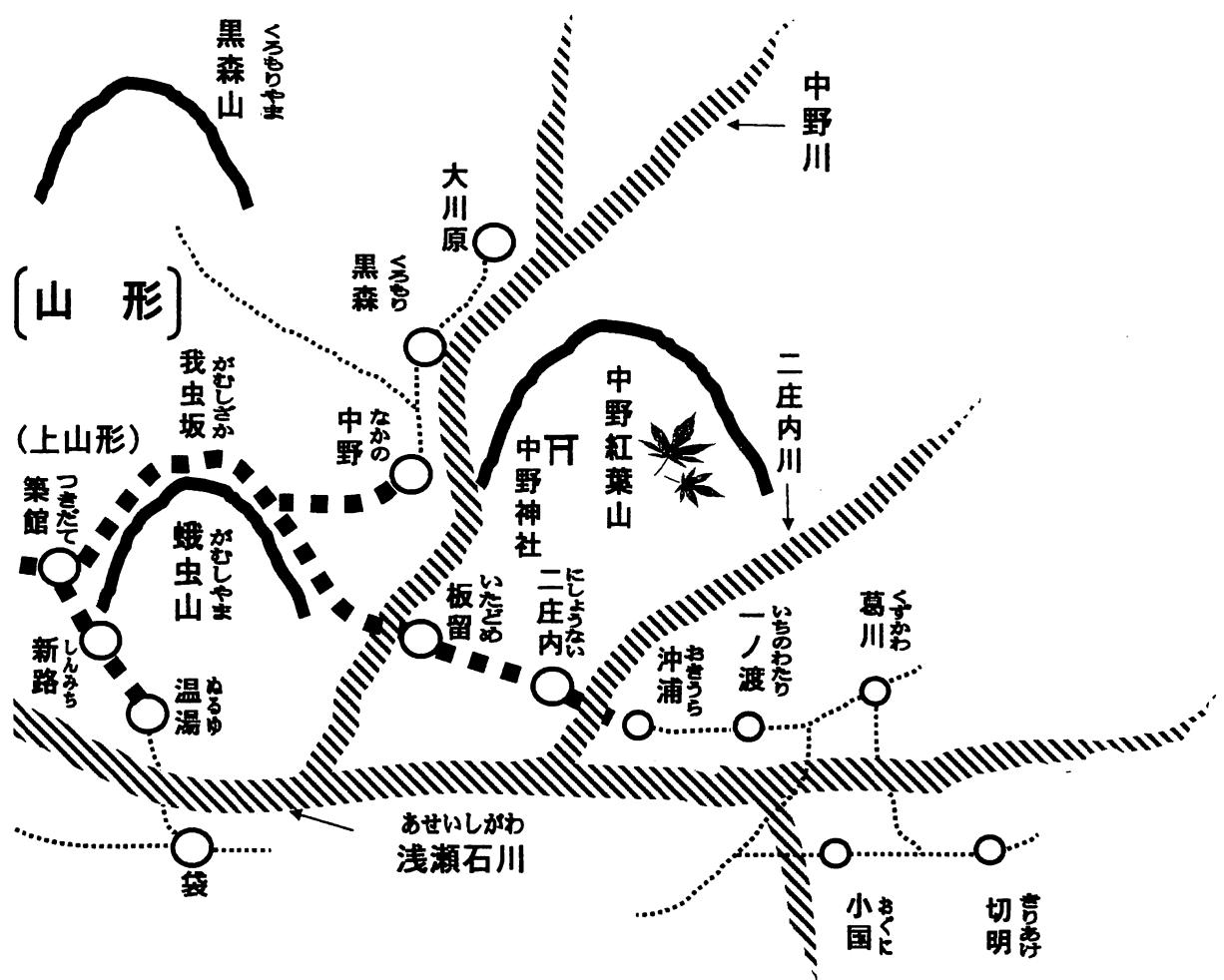
浅瀬石川なせせきかわが雪の中に流れているのを眺めながら、石名坂いしなざかを登つて行くと、
豊岡とよおか、中村なかむら、築館つきだて、新路しんみち、温湯ぬるゆという家の並びであつた。

※実際は、福民、牡丹平、石名坂、豊岡、花巻、中村、築館つきだて、新路、温湯という順序
になるのですが、それと異なつた記録きろくになつたのは真澄が後でまとめて書いたためと思われます。

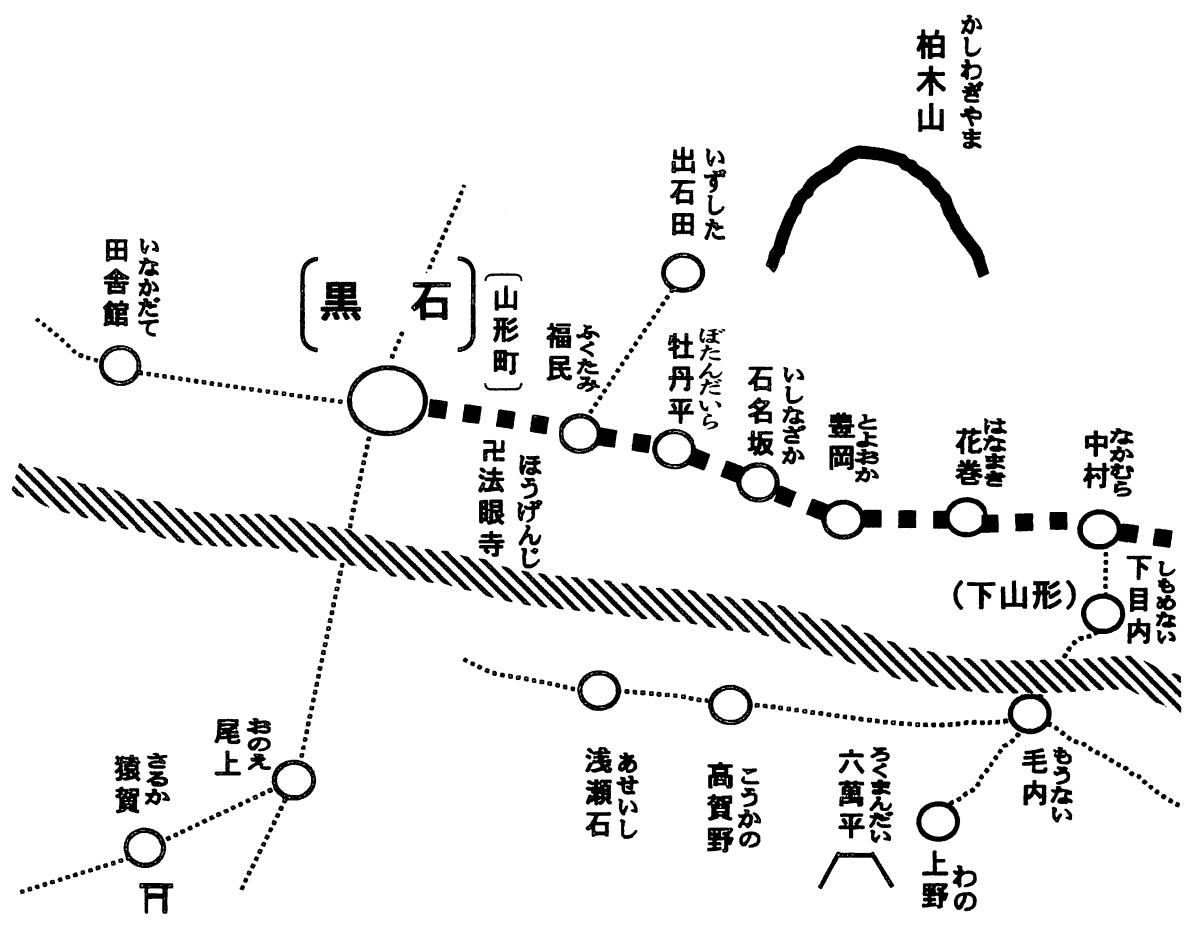
温湯は家が三十軒さんけんほど川岸に立ち並び、湯船の底には石をびっしり敷き並べてある。湯小屋が軒のきを並べて冬ごもりをしている。

遠い昔のこと、脛すねを矢で傷つけられた鶴が澤水のところで動かずに日を過ごした。やがて、傷が治つたのであろうか羽ばたいて空高く飛び去つて行つた。人々はこれを見たり聞いたりして、そこに温泉のあることを知つた。

初めは山で働く木こりたちばかりが入浴にゅうよくしていたが、病にききめがはやいと知れ渡り、やがて、鶴派の湯と呼ばれ、またの名を鶴の湯ともいうようになつた。



[黒石 ⇒ 山形] 周辺の略図



■ ■ ■ ■ ■ は、菅江真澄が歩んだ道

羽立^{はだち}とは、物の初めをいうのである。また、二百年ほどの昔であろうか。
花山院忠長卿^{かざんいんただながきょう}が入浴されたころ、世間の人々はみんなぬる湯^{せけん}といつていた。
湯の半ば^{なか}は冷え、半ば^{なか}はあたたかいので、いわゆる半冷半温^{はんれいはんおん}というところ
であろう。

この夜は古沢^{ふるさわ}という家に泊まつた。わたしは父母のおられる国^と（三河^{みかわ}・^{かた}愛知県^{あいちけん}）に居て、雪がとてもおもしろく降つたので、親しい仲間たちと雪見^{ゆきみ}をしながら語りあつた夢を見た。と思つたら夜が明けた。

※羽立^{はだち}（派とも書く）——畑地^{はたぢ}につながりがある。切り開いた新しい土地^とという意味を持つ。

※温湯温泉の「鶴の湯」伝説や花山院忠長卿^{かざんいんただながきょう}については、「わたしたちの黒石」第二集の六十八頁より載^のせてていますので、ご覧ください。

◆ 真澄の紀行文

寛政七年（一七九五）十一月九日・十日

九日 雪がとても降り、風の声も激しく吹くので、無理^{むり}して出発しないで、宿の主^{あるじ}と語り合つて今日も暮れようとしている。

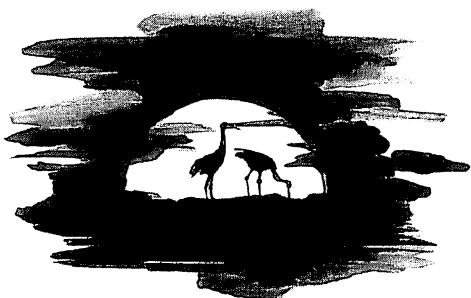
十日 板留の湯も見たいし、中野の浅尾山^{あさおやま}も見たいので、宿をたつた。

朝明けの景色は、とても言葉では表わせないほどの美しさだ。

この家並みの端の、黄檗宗の僧侶の住む境内も真っ白で、岩の上の杉もたわみ、二三本の松が高くそびえる川岸の籠も雪で隠れ、なかば凍つた谷川の水の流れがどこおるようすも素晴らしいものだ。

雪の山道を分けて進み、不動尊の堂の辺りへ行こうとしても、雪が深く道もないのに、どうすることもできなかつた。仕方ないのでそのまま板留に来た。この湯は川端に湧き出でているので、道を下つて入浴した。

こうして、日も傾くころ、帰りの道を歩き、蛾虫坂に立つて左に黒森、右にすもとり山など見て（詠つた）。日が暮れて黒石に着いた。



十 中野の「浅尾山・不動尊」

現在、「中野の紅葉山」という言葉はよく聞きますし名称として用いられていることは、みなさんも知っていることと思います。

真澄の述べている「中野の浅尾山」という名称は現在ではあまり耳にしたこともないでしょうが、昔は中野の村内からみて、中野川を挟んだ対岸に見える山・現在の「中野紅葉山」あたりを含めて「浅尾山」と呼んでいました。

真澄は、有名な中野の「不動尊」にお参りしたかったのでしょうか、とても雪が深かつたので行き着くことができなかつたようです。

※不動尊—色々な障害を取り除き、人々を助け願いを満足させることなどから人々に信仰された「不動明王」のこと。人々を助けるためには、どのようなことがあっても動搖しないで成し遂げる「不動」・人々にとつて尊い不動明王である「不動尊」という意味が込められていると思います。

真澄は、この時期から三年後の寛政十年（一七九八）、紅葉の時節に「浅尾山」を訪れています。

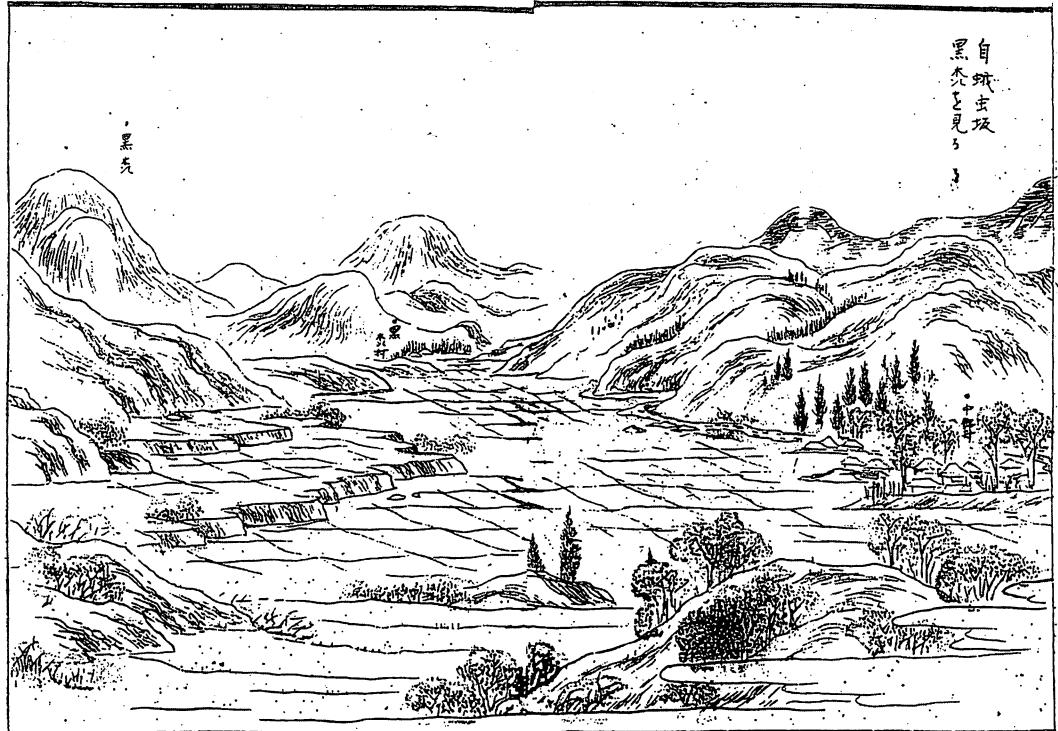
◆

真澄の紀行文

寛政十年（一七九八）九月二十一日

蛾虫

自城
虫坂
を見る



No.10 昔の画家、山形岳泉の絵
「蛾虫坂からみた黒森村（中央）。中野村（右はし）」

た。三年の昔、雪の中をよじ登つて、その時から面白いところよ、といつも思つていだが、どうして、沢山の木たくさんが皆夕陽のような色に染まつて、あまりの見事さに蛾虫の坂を越えることもできず、立ち止まつて眺めながら歌を作つた。

中野村に入ると、荒川あらかわ（中野川）に土橋どばしをかけ渡していた。川岸が高く、向こうには野原。切り立つた崖がけ。岩の峯みねがそびえたつ頂上ちようじょう。小さな坂などの木々、高いのも低いのもすべて紅葉し、落ちる水が岩を飲み込んで激しく流れる風情ふぜい、はらはらと散る紅葉に夕日が映る。

群れ立つ杉の下枝などに這いかかつた葛つたえだは

や散りかかった木の葉、これも紅葉したかと見て驚くばかり、「名高い立田川の紅葉さえも及ばないであろう。」と独り言を言いながら橋を渡つた。

不動尊の近くに生えている一本の紅葉の枝は、高麗錦（大陸から伝えられた技術によつて織られた高級な錦織）を一群れひるがえしたように、見る目にもまぶしいほど立派である。

拝殿に入ろうとして清らかに澄んだ冷水の滝のそばで、岸に立ち、（詠つた）。

※立田川——「龍田川」のことは、一〇七頁に載せてあります。

菅江真澄は、寛政七年（一七九五）十一月には「雪景色」を詠い、寛政十年（一八九八）九月には「紅葉の景色」を詠つています。

その歌からは、「浅尾山」の「浅い」という言葉のイメージと関係付けて「幾日も降り続けている雪はとても深く積もつてゐる。山は浅尾という名前にして置いているのだが。」とか、「赤い紅葉の深い色で染め尽くされている山や川、浅尾という名に当てはまらないのではないか。」など

の気持ちを受け止めることができます。

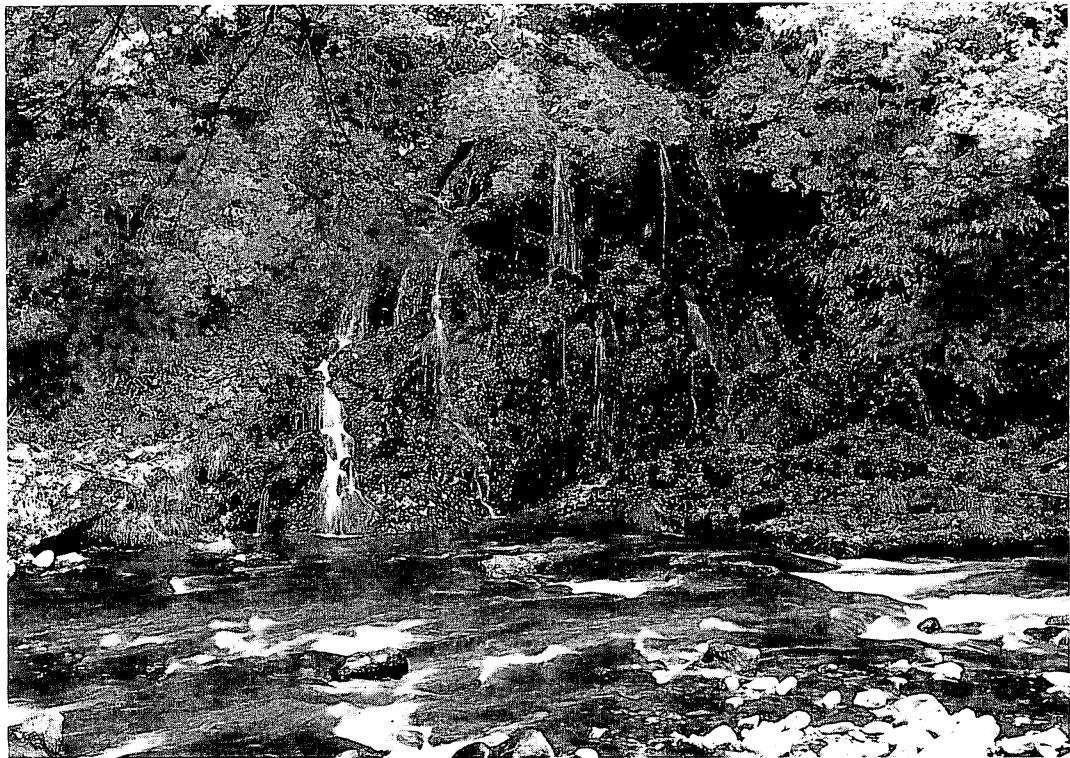
真澄は雪の季節に、「板留の湯も見たいし、中野の浅尾山も見たい。」「中野山の雪にも心がひかれる。」として宿を出発しました。そして、周囲を見て、「朝明けの景色は、とても言葉では表わせないほどの中野に足を運んでいます。」ということを述べ、中野に足を運んでいます。

中野には、紅葉の景色が過ぎた後、冬の季節に移れば目を奪われるような素晴らしい雪景色の世界が現れていたことと想います。また、中野の浅尾山（中野の紅葉山）やその周辺の景色は、秋の時節に限らず、春夏秋冬の移り変わりに連れて、それぞれ心が引かれてしまうような姿を現していくことで広く知られていたのではないでしようか。

昔の中野村の様子については、真澄が書いたころから六十五年ほど後に書かれた「津軽道中譚」にも述べられています。

◆ 津軽道中譚 万延元年（一八六〇）

中野村にある不動尊は、黒石の御祈祷所である。入口に石の大鳥居がある。高さも丈余り（約三メートル余り）もあるだろうか。とても



現在の不動滝

みごとな鳥居だ。石段を下りると土橋がある。左右は桜木や楓の木が多い。川の正面にはすばらしい糸滝がある。橋を渡つて二の鳥居を過ぎ、石段を登つて行くと神社に着いた。境内には六本の大杉があり、神木の杉はすぐれて太い。神社の傍らには清い流れがある。

神社には不動尊の額があり、神社の前には神楽殿がある。後ろの山は高く聳えて、生えているのはほとんど楓の木である。神社の境内を巡つてから石段をおりた。

堪えがたき 夏の暑さも白糸の

滝の中野の宮居冷しき

※現在でも、大杉の木陰があり、神社の右側を冷たい清流がサラサラと通つて滝になり中野川へ落ちていく、という環境があります。

我慢できないような夏の暑さも、白糸のようになつて流れ落ちる滝がある中

野神社境内は、なんと涼しいことか、という気持ちが伝わつてくる歌ですね。

このように、中野村は不動尊堂や不動滝。紅葉山で昔から知られています。

不動尊堂は南北朝の時代のあたり（一三三六～一三九二年頃）に建てられ、そのころより、修業者が苦行を積んで、心身共に力を深める「中野不動の修験」が行われていたといふ言い伝えがあります。

また、古い文書によれば、戦国時代、浅瀬石城の城主千徳氏に仕えた山形周防長胤という武将が、攻めにくく守りやすい中野山に不動館を構えて住み、周辺の村々（不動館村・温湯村・板留村・大川原村など）を治めていたと言われています。

※戦国時代一年代は、津軽為信と千徳政氏の時代、ということから考えて、天正年間（一五七三～一五九一年）と思われる。

そのようなことから、中野村は初めは不動館村と呼ばれていました。現在の中野神社の右手にある坂道を登った上の高い場所にある平地、そこが不動館の跡と言われ、現在は中野紅葉山の「観楓台」になっています。



集落から見上げた崖上の不動館跡。崖下は中野川の渓流になっている。

昔、黒石の田地を調べた享保年間の覚書に、「中野村・板留村の西添いまでを上田とする。」とあることから、享保年間の頃（一七一六～一七三五年）には、中野村と呼ばれるようになつていたと思われますが、現在でも字名で「不動館」の地名は中野に残っています。

★ 分かっている昔の「家の数」や「着衣

昔の中野村や周辺の村々の家の数がどのくらいあつたのか、その地域で暮らす人们はどのようなものを着ていたのか、などのこととで、記録に残っている内容から紹します。

☆ 村々の「家の数」

各村の正保・慶安年間の頃（一六四四～一六五一年）の家の数は、不動館村（中野

村)は九軒、山形村(築館周辺)十五軒、温泉村十七軒、袋村六軒、下芽内(下目内)村五軒、石名坂村九軒、(黒石地方誌の津軽藩絵図)という軒数が記されていきます。

☆ 「新撰陸奥国誌」という本には、明治の初年(明治元年は一八六八)の頃、中野村の家の数は二十九軒で、村が山中にあつて田や畠が少なく食糧が十分でない。そのため、樵(山の木の切り出し)や炭(木材を蒸し焼きにして作った燃料・木炭)を作り、その収入を生活に役立てたこと。同じ村の上中野村が十軒、黒森村が七軒あつたことなどが記されています。

☆ 中野周辺の集落で暮らす人の「衣類」

江戸時代の農民や町人たちが着用した衣類に付いては、「私たちの黒石。第一集(二十五頁)」に述べていますのでご覧ください。

今回は、それとは別に中野の周りの山村で暮らす人の着衣(着ている衣類)について紹介したいと思します。

比良野助三郎貞彦という江戸勤めの弘前藩士が、天明八年(一七八八)、殿様のお供で津軽へやつて来ました。そして、寛政元年(一七八九)三月に江戸に帰りましたが、その間に、津軽の土地や人々の様子を描きました。それを載せている本は「奥民図彙」と言われています。

紹介する絵図はその中の一枚です。真澄が中野を訪れた時に会った人が着ている衣類について、説明をつけて描いています。

★「奥民図彙」より

☆ 絵図の文 — 内容のあらまし

カツコロ — よく見るとカツコロは、皮の衣です。

中野という紅葉の山へ行つたとき、この図に書いたようなものを着た人に会つた。その人は、ここ（中野）から三十里ほど山奥にある桐ヤケ（切明）という所の人である。そこは雪も早く降り積るので大方（ほとんどの人）は皮の衣を着るという。多くの人はアオシシ（かもしか）の皮、熊の皮である。犬の皮が最も良いとしている。

寒中など吹雪の激しい時は、息もできなくなり眼で見分けることもできなくなる。このようなときに歩いて行くと、道を見失つたり息がつまつたりして死ぬ人もある。そんな時はその場所にじつとして居る。

吹雪が一昼夜も続けば雪にうずもれてしまいますが、そのような時に皮（皮の衣—カツコロ）を着ていなければ、雪やけして身がただれ物凄く痛む

カッコロ 横ヨコニカツコロハ皮衣ナルヘ

中野ト云往業ナガシノシハ行ニトキ如因キモ、ニ着セシ人達其者ハ

此所ヨリ三十里計山奥、桐ケト云所、モノナリ其所ハ雪モ草リ
フリニ方々大皮オカヒニ着ト云タタハニケ、皮ト云、熊、波ナリ大皮

ヲ別テ住トス寒中十ド雪吹シヨキトキハ鬼ツカラレス曰見合ズ如

トキ歩行スレバ道ヨウシ

ナヒ或ハ息ニシマリ死ス

トアリ其時其所ニ
即ニテ居ルナリ

雪吹一昼夜モ

スレハ雪埋

ルナリ其時皮

ヲ着サレハ

雪ヤケトテ身外レ甚ニ痛エヘ

是ヲ着ト云



No.11 比良野貞彦の描いた「カッコロ」の絵図
(絵図の文は、本文に記した以外の部分は省略。)

ようになる。そのためこれ（カツコロ）を着てているという。

※カツコロ——皮衣（かわころも）の変化した言葉、と考えられる。

菅江真澄が書いた紀行文を紹介していますが、「カツコロ」は、それを書いた年代より、三十八年ほど後の時期に描かれた絵図になります。中野周辺の山村で暮らす人たちの当時の冬の服装がよく分かるだけなく、厳しい寒さを乗り越えるため手に入るものを生かして活用していく知恵を感じ取ることができます。

(一) 寧親公 百本の楓を奉納

「浅尾山と不動尊の堂」のことは、寛政七年（一七九五）の菅江真澄の記録にも述べられていて、中野は不動尊が祀られている所として知られていたことがよく分かります。

そして、津軽三不動の一つとして昔から人々の信仰を集めました。

※津軽三不動（津軽地方にある三つの不動尊）——中野不動尊・長谷澤不動尊（現黒石市上十川東方の山中）・古懸不動尊（現碇ヶ関）

中野村は明暦二年（一六五六）二月から黒石領となりました。黒石二代

領主の津軽信敏公は、黒石鎮守の社として社殿（神社の建物）を建てたり、延宝五年（一六七七）には社領（神社の領地）を与えたりしました。その後の黒石領主も剣・幡・手洗石などを奉納したと言われています。

そして、黒石藩の時代に中野山は不動堂の境内とされ、中野川の溪流や不動の滝と調和する紅葉の名所として次第に知られるようになりました。黒石の領（藩）主だけでなく、黒石の宗家（本家—黒石津軽家は弘前津軽家の分家）である弘前藩主もたびたび不動尊参詣をしながら、紅葉の鑑賞に訪れていました。

特に、紅葉の景勝地（とてもすばらしい景色の名所）に発展していく基を造つたのは、弘前九代藩主になつた津軽寧親公でした。

寧親公は、満十七歳の安永七年（一七七八）五月から十三年間第六代黒石領主でした。その後、養子となつて宗家（弘前津軽家）を継いで弘前九代藩主となつた殿様です。

寧親公の子息、典暁公が第七代の黒石領主として後を継いでいましたから、寧親公には黒石の地に対する深い思いがあつたのではないかと思います。

享和二年（一八〇二）九月二十六日、中野を訪れた寧親公は、その晩温



黒石市天然記念物「中野のモミジ3本」

寧親公お手植えのモミジ

湯村に一泊しました。そして、中野山の不動堂境内（現中野神社境内）や境内を通つて白糸のよう落ちて中野川を泡立てる不動滝、紅葉を映して流れる中野川など、その日眺めてきた情景に心を動かされました。

翌年の享和三年（一八〇三）四月十三日に、寧親公は楓（モミジ）の苗木を百本ほど京都から取り寄せ、中野不動尊へ奉納し「中野紅葉山」に植えさせました。また、自分でも現在の場所に三本の楓（モミジ）をお手植えしました。

そのこともあって、益々すばらしい紅葉の名所として知れ渡り、京の紅葉の名所嵐山に対し「小嵐山」と呼ばれるようになりました。

万延元年（一八六〇）に書かれた「津軽道中譚」には、「……石段を下りる

と土橋がある。左右は桜木や楓の木が多い。川の正面にはすばらしい糸滝がある。」と述べられていることからも、享和三年（一八〇三）に植えた

楓（モミジ）の成長が伝わって来る思いがします。

文政十二年（一八二九）には、弘前十代藩主津軽中守信順公が、中野山紅葉の素晴らしい景色が見られる「蛾虫坂」を「龍田坂」と名付けました。龍田川は、昔の大和国（奈良県）生駒郡の龍田山のほとりを流れる川です。平安朝時代、そこはモミジの名所とし広く知れ渡つてきました。散つたモミジが龍田川の水面を流れてくる風情の美しさも格別のものがありました。在原業平という方がその美しさを歌に詠みました。

今はやぶる神代も聞かず龍田川から紅に水くくるとは
今でも「百人一首」で詠まれている歌です。この歌にちなんで「蛾虫坂」が「龍田坂」と名付けられました。

※「龍田川」や在原業平の詠んだ右の歌の解釈などについては、「私たちの黒石。
第二集七十七頁」に掲載していますのでご覧ください。

蛾虫坂は、温湯村と板留村の中間、浅瀬石川北岸の蛾虫山断崖の上を通る峠の坂道でした。蛾虫坂と峠からは、浅瀬石川・板留村・中野川・中野紅葉山・中野村・黒森山・黒森村・温湯村・袋村などが眺められ、すばら



黒石市天然記念物「大杉」
(3本の内の1本)

しい景色であつたそうです。蛾虫坂から眺められる中野紅葉山の風景も、世に広く知られてゐる紅葉の名所のように美しかつたのだと思います。

なお、寧親公お手植えの楓（モミジ）三本と、菅江真澄が述べていた「大杉」のことと思いますが、その内現在残つてゐる「大杉」三本が、黒石市天然記念物に指定されています。

（「大杉三本」黒石市天然記念物 指定 昭和五十八年二月一日）
（「中野のモミジ三本」黒石市天然記念物 指定 昭和五十八年二月一日）

（二）中野紅葉山の「対植えモミの木」——県天然記念物
神社境内の中野川に架かつて いる赤い欄干の「不動橋」を渡ると、宮地（神社の境内）と神域との境を示す隨身門があります。その前に、東西一対（二本で一組）のモミの木が枝葉を伸ばし空高くそびえて います。

※隨身——昔、身分の高い人を守る護衛兵という意味をもつて いるが、このお話を神社守護のため左右の神門に像が据え置かれている。



県天然記念物 「中野神社対植えのモミ」

東側（写真右）に生えているモミの木は、高さ約三十六メートル、幹の周囲が約四・四六メートル。西側（写真左）に生えているモミの木は、高さ約三十四メートルで、幹の周囲は約三・八八メートルあります。いずれも樹齢（木の年齢）は二〇〇～三〇〇年と推定（おしあかって決定）されている大木です。

神社の文書によれば、御神門が建てられたのは明和九年（一七七二）。この数十年前後の年代である享保五年（一七二〇）と文化二年（一八〇五）に、不動尊宮地の境に樹木を植えた記録があります。モミの木の推定樹齢（おしあかって決めた木の年齢）のことなど考え合わせると、これらの時期に現在のモミの木が植えられたものと考えることができます。

また、古い時代には神門が建てられていなかつたことから、対植えのモミは隨身の代わりに神門を守る意味を込めて植えられたのではないか、とも考えられています。

モミの木は、「マツ科・モミ属・モミ」で、モミ属の中でも暖かい地方に生育しやすい樹木です。

みなさんも分かつていて、黒石市周辺の地域は積もる雪も多く寒さも厳しい時節がありますので、モミが育つのに適している地域とは言え

ません。

そのような自然環境の中につつて、その姿が整然として成長する勢いが保たれていて、現在も成長が認められていることなどの状態があり、青森県の天然記念物に指定されました。

青森県に生育して天然記念物の指定を受けているモミの木は、大部分が単木です。しかも積もる雪の少ない南部地方に多いのです。

中野神社のモミの木は、積雪の多い地域に育ち「対植えの形態」の大木となっています。そういう点からも貴重な樹木と言えるでしょう。

(「中野神社対植えのモミ」県天然記念物 指定 平成二十年四月二十五日)

★ 最近の「中野紅葉山」の盛況

現在「中野紅葉山」は、本県を代表する紅葉の名所として全国に知られています。

地元の南中野では、紅葉の時節がやつてくる前に、町内の人たちが総出で紅葉山の雑草を刈り払うなどして整備に努めています。それが、毎年、町内の大事な年間行事として行われています。

黒石市では、夜の紅葉山の獨特な風情を鑑賞してもらうため投光器や

水銀灯など用いてライトアップの準備。中野神社において「黒石観光協会」による「中野紅葉山」安全の祈願。平成二十年度に組織された「小嵐山黒石温泉郷活性化協議会」では、「中野川と紅葉」をテーマにした話し合いの開催。など、多くの方々が観光客を迎えるための行事振興に尽力しています。

紅葉が鑑賞できる期間には、県内外の人々が訪れますので、黒石市（商工観光課）では中野神社境内に案内所を開設し、おいでになる方々が気持よく紅葉の景色を味わえるよう努めています。また、それと共にパンフレットを差し上げ、周辺の観光地の案内も兼ねて親切に対応しています。

紅葉が見ごろを迎える時期には毎年賑わいを見せており、訪れる人々が一日に一万人を超えるときもあります。本年度は中国や韓国から訪れた観光客も目立ちました。

歴史ある「中野紅葉山」、今後も益々の進展を成していきたいものです。

十一 川端に湧き出でいる板留の湯

真澄の紀行文の中に「板留の湯は、川端に湧き出でているので、下がつて入浴した。」と述べられています。雪の積もる寒い季節、板留に着いた
真澄は、上の道から降りて川端にある湯壺（湯船）に入り、体を温めたこ
とでしょう。

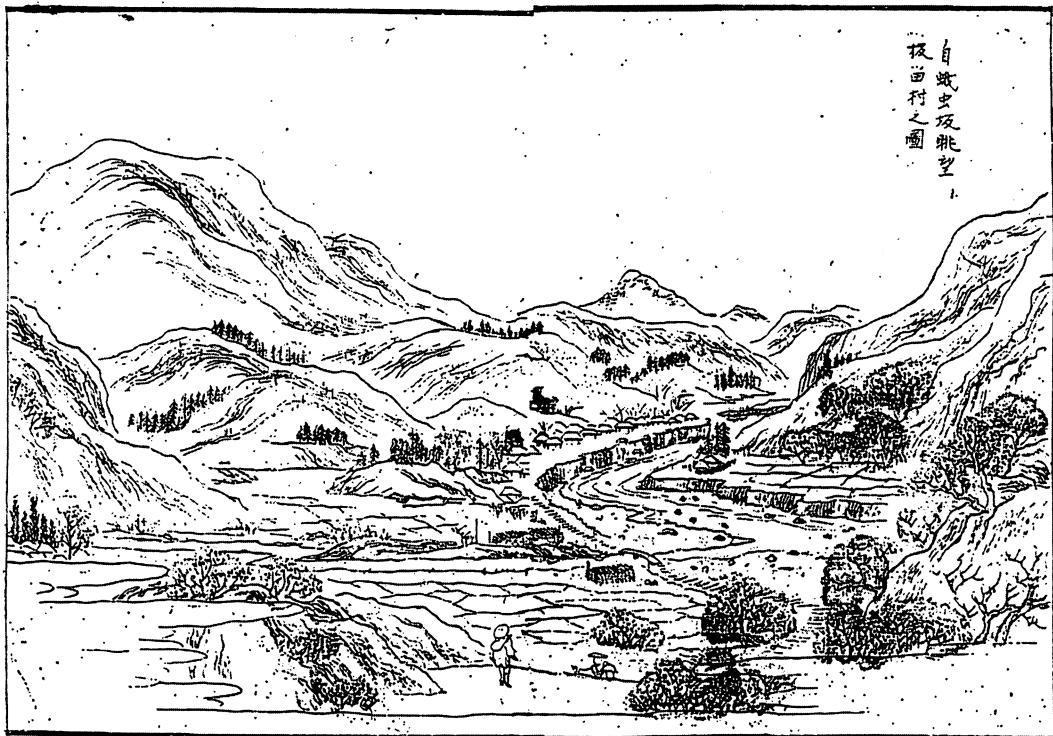
真澄の文章からは「板留の湯は、川端にある。」というように湯壺の場
所がはつきり分かれています。

◆ 津軽道中譚 万延元年（一八六〇）

万延元年（一八六〇）に書かれた「津軽道中譚」には、もう少し詳しく、
「板留は、黒石のご領地である。村落の前には沖浦川の急流がある。その
川に添うて、上・中・下三ヶ所に温泉がある。眼病に効き目がある。秋に
は入浴の客が多い。」

と述べられています。

板留村は黒石藩の領地で、万延元年（一八六〇）の頃は、津軽承叙公が
黒石藩主（黒石藩四代藩主。第十一代黒石領主）として治めていた時代になりま



No.12 昔の画家、山形岳泉の絵

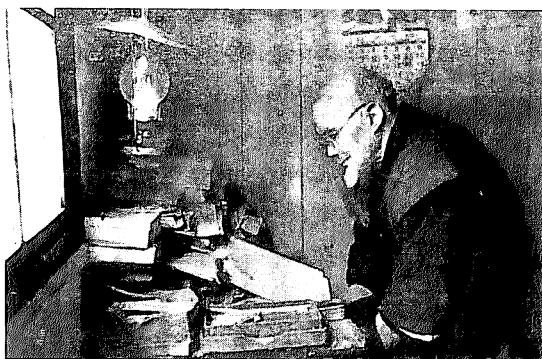
「蛾虫坂から見た板留村」—上流の川沿いから上の湯・中の湯・下の湯が描かれている。

す。

文中にある「沖浦川」は、現在の浅瀬石川のことです。昭和六十三年（一九八八）「浅瀬石川ダム」が完成したときに水の底に沈んでしまいましたが、ダムができる前までは板留の上流に二庄内・沖浦・一ノ渡などの村がありました。川の流れが沖浦村を通つてくることから、その頃は「沖浦川」とも呼ばれていたのだと思います。

川に沿つて上流の方から「上の湯・中の湯・下の湯」と、三か所の湯壺が設けられ、人々に活用されていたわけです。

現在その浴場はありませんが、板留は江戸時代から人々に親しまれてきた温泉であつたと 思います。



No.13 丹羽洋岳

(一)

★ 牧水が洋岳を訪問

歌人かじんが親しんだ湯したと自然しぜん — 大正年代たいしょう

昔、板留いたどめに丹羽洋岳にわようがくという人が住んでいました。洋岳は板留いたどめに生まれた人で、とても優れた歌人かじんでした。ランプの宿、青荷温泉あおにを開いた人としても知られています。

明治三十八年（一九〇五）、十四歳の時初めて歌を作つてから、さらには歌を作る勉強を続けました。石川啄木いしかわたくばくや若山牧水わかやまぼくすいという当時の日本有数とうじゆうすうの歌人の指導を受け、交流こうりゅうしたりして、歌人としての力量りきりょうを深めていきました。

た。

子ぞいとし 庭の葉かげにあそぶ子の 顔の白さよ手々のしろさよ
洋岳の歌です。

— 子どもほど愛しいものはない。庭の葉かげで遊んでいる子の、
顔のなんと白いことよ。小さな両手のなんと白いことよ。 —

小さな子に対してやさしさに溢あふれている気持ちが伝わってきます。
す。深い愛情で子を見守っている姿を受け止めることができます。
ね。洋岳の人柄ひとがらも伝わつてくるような気持ちになります。

有名な歌人である若山牧水が、地方ちほうの歌人かじんを訪ねながら旅を続つづます。



No.14 上流の川沿いに「上の湯」、中央に「中の湯」、下流にある「下の湯」は、木陰で石垣だけが見える。

け、板留の丹羽洋岳の家に来たのは大正五年（一九一六）四月のことでした。牧水は洋岳の歓迎を受け、板留の温泉に入り二十日間ほどゆっくりと過ごしました。

江戸時代の「板留温泉」については、前に述べましたが、大正時代のころにも「上の湯・中の湯・下の湯」と呼ばれている三か所の浴場があり、湯壺の数などは変わらなかつたようです。

板留村の道路下が崖で、浅瀬石川が流れています。浅瀬石川の流れから見て一番上流にあるのが「上の湯」です。次は「中の湯」、そして「下の湯」というように川に沿つて浴場がありました。

ただ、川の水面から見た位置は異なつていました。一番上流にある「上の湯」は、水面に近い低い場所でしたから川水が入らぬよう

に石垣を巡らしていました。「中の湯」と「下の湯」は崖の中ほどに造られていきました。

◆ 鮎がのぼってきた浅瀬石川の自然

板留にある三か所の浴場の中で、牧水が一番好んだのは「上の湯」でした。ところが、牧水が来る少し前に雪解け水で石垣がこわれ、浅瀬石川の濁った水が浴槽に入ってきていました。洋岳は「中の湯」か「下の湯」に入るよう勧めたのですが、牧水はどうしても雪解け水が入ってくる「上の湯」に降りていきました。

洋岳の家は客舎と食品雑貨を商っていました。「上の湯」の降り口は、その店の前の道路を隔てたところにありましたから、牧水が「上の湯」に降りていく姿は、店にいる洋岳にはすぐ眼につきました。

ある日の朝、牧水がいつものように「上の湯」に降りて行きました。しばらくして、牧水の上がつてくるのが遅いことに気づいた洋岳は、様子を確かめに行きました。大切なお客さんが長い時間入浴して具合でも悪くしてはだめだと思ったからです。



峡（山々の迫る合間）より見える岩木山

洋岳が崖の上まで行つたとき、下の方から牧水の声が響いてきました。牧水は、「上の湯」の川辺にあるこわれた石垣の上に立つて、川に向かい流れる水の音を超えるかのようならんとした声で歌つていました。洋岳は、一言も聞き漏らすまいと、その場にじつとしていながら耳を澄ました。

雪解水 岸に溢れてすえ霞む

むら山の 峠より見ゆる白妙の
浅瀬石川の鱒とりの群

岩木が峯に霞たなびく

浅瀬石川の流れの音に消されそうでありますがら、牧水の澄んだ美しい声は、はつきり洋岳の耳に入りました。

— 春四月、浅瀬石川の流れは、岸から溢れて流れ続け、水煙で端の方が霧が立ち込めたようにぼんやりとしている、という大量の

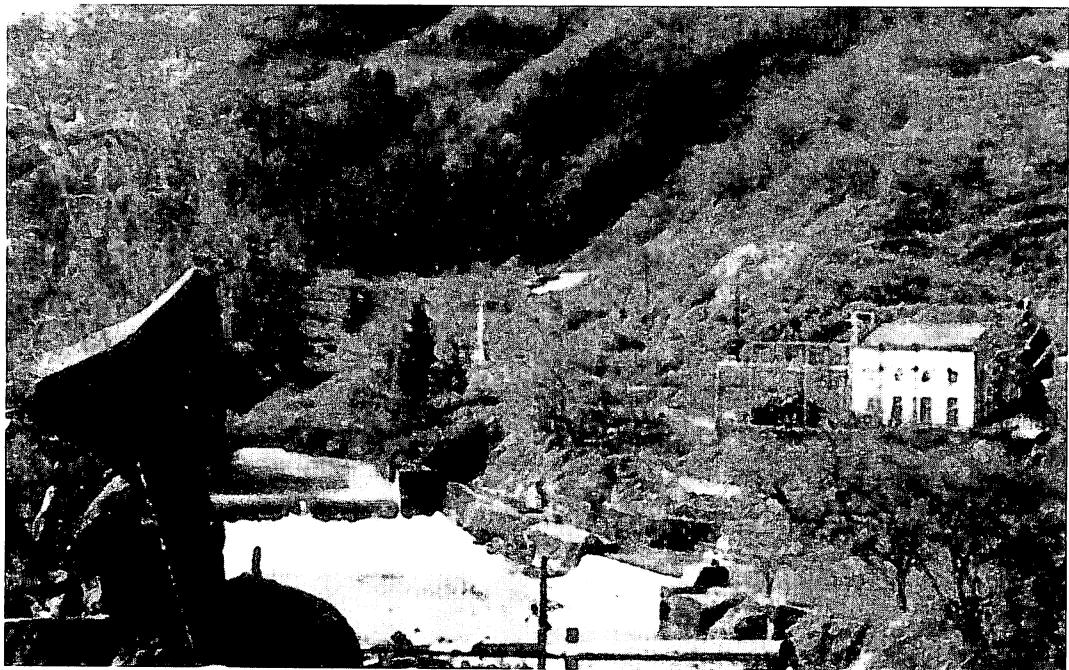
雪解け水が流れている。そのようなときには、海から鱈が浅瀬石川に上つてくる。浅瀬石川の岸辺には、その鱈を捕る人たちが群がつてゐる。——また、山と山が両側に迫つてゐる合間から見える岩木山。その頂に残雪を載せ、白色の峯に霞がたなびいてゐる。——この二首の歌を読み味わうと、その頃の「活力息吹く動と若草萌える静」とも言える素晴らしい自然の情景を感じ取れるのではないでしようか。

(二) 「上の湯」の川岸で遊んだ頃——昭和年代

筆者が子どもの頃、夕方になると家族と一緒に板留や温泉、落合の各温泉を交互に訪れて入浴したことを覚えてています。

帰りは日が暮れて、道路の小川沿いにも、浅瀬石川・中野川の岸辺にも、川の流れの音に合わせるかのように弱くそして強くゆっくりと舞うような螢の光がきれいでした。

板留温泉の「上の湯・中の湯・下の湯」にもよく入浴しました。今振り返つて考えると、前に述べた紀行文・道中譚そして大正時代の情景が、時代が進むとともに変化があつたとしても、それと似たような自然が残つていたのではないか、という思いがしています。



No.15 左下—堰堤を越えて落ちる滝
右—板留変電所

板留の方の川で遊ぶ場合、筆者が遊ぶ場所としてよく活用したのは、一番上流にある「上の湯」の辺りでした。川沿いにあつたので川水を防ぐ石垣を超えるとすぐ浅瀬石川に入れます。そこは、緩やかな流れで底が砂場という環境になつていて、游泳にはもつとも適した場所になつていきました。

仲間たちとそこで泳ぎながらゲームをして歓声をあげたり、カジカを網で捕つたりなどして過ごしました。水中で体が冷えすぎると、みんなで「上の湯」に入つて体を暖める、といふ愉快な遊びをして過ごした思い出があります。

板留の村に沿つた道路とその下を流れる浅瀬石川の間は崖になつていました。「中の湯」と「下の湯」は、その崖の中腹にありました。「中の湯」と「下の湯」には、川遊びをし

ない時に入浴しました。特に、「下の湯」の窓は川に面していましたから、ツバメの大群が餌を捕るために水面を素早く飛び交う様子や、下流の蛾虫山に向かって青く白く流れいくせせらぎなど、素晴らしい景色を眺めながら入浴することができました。

◆ 滝に挑む鱈の群れ

浅瀬石川にはそのころも鱈がのぼつてきていました。「上の湯」の位置から少し上流に、川幅いっぱいの堰堤（水を他の場所に引くために築かれた堤防）が築かれていました。堰堤の近く（落合側）に板留変電所がありましたが、浅瀬石川をせき止めているその堰堤は、主に温湯にある発電所へ水を送るためのものでした。

堰堤から溢れる川水は、高さ数メートルで川幅いっぱいの白い滝になつて落ちます。ゴーゴーという音が身に響き、舞い上がる水粒の輝きがきれいででした。

それより見事だったのは、その滝を越えようとして飛び上がって挑む鱈の群れでした。白く流れ落ちる滝に向かい、尾びれを鋭く動かし魚体を震わせながら、一匹、また一匹と、上流を目指して突き進みのぼりつめてい



く鱈を見つめたものでした。

滝下の川幅の広い両岸には、「投げ網」を用いて鱈捕りをする人がたくさん集まっていました。堰堤の中央には行けませんので、岸辺の岩や川に突き出ている石の上などを選んで自分の足場を決め、水中の鱈の動きを見抜いて網を投げ入れるのでした。その様子を見物にくる人もたくさんいました。

筆者がとてもびっくりしたことがありました。それは、一回投げた網の中に一メートル余りの鱈が五匹も入ったことでした。その人は、網を水面すれすれに低くして注意深く岸に引き寄せてから、自分の足場に上げました。（その人は、村上さんという筆者の近所の人でした。筆者が六、七歳—昭和十七年。一九四二前後—の頃であったと思います。）今でもその様子が目に浮かびます。

幼い頃の筆者は、丹羽洋岳のことわら若山牧水のことわらも知りませんでした。しかし、紹介してきた昔の自然が、ある程度受け止めることができるように地域環境の中での幼い頃を過ごしてきた感じがします。

牧水の歌を静かに読みますと、その頃の地域の風情や生活が胸に湧いて来るのです。

★ 洋岳も述べています。

雪解水 岸に溢れてすえ霞む 浅瀬石川の鱈とりの群
歌人若山牧水は、かつて（以前・昔）浅瀬石川の崖の上に立つてこの一首を声高らかに謡つたのである。

暖かな春四月、深山の雪は解けて、黄色に濁つた水は川の両岸から溢れるばかりに流れ、汀の蘆は芽を吹き、川原柳の緑の枝々に飛んだりはねたり川鳴が鳴く。その川鳴の声は、魚族の活躍を告げる声でもある。

そうなると川の畔の漁夫（漁をする人）どもは黙つていられず、皆投げ網を背にして鱈捕りに出かけて行く。浅瀬石川の鱈は、海から十三潟（西郡十三湖）に入り、其処から二十日も三十日もかかるつて上流へと溯るのだ。鱈は回帰性（生まれた場所やもといた場所に戻る性質）を有している。浅瀬石川に生みつけられたものは成長の後、必ず生地に戻つて子を生むという。

「浅瀬石川の魚族（丹羽洋岳）」の書き始めの文章です。
暖かな日には堤に座つて網の目を繕う漁夫の姿があり、春雨の日は川の浅瀬に明るくなつたり暗くなつたりする漁火が映る、という自然環境の

時期じきであつたと思います。

洋岳ほうもんが若山牧水のの訪問ほうもんを受けてから十五年後のの、昭和六年（一九三一）に述べられた内容のでした。



◇ 活用した「写真・映像・絵図」の出典や提供

掲載No	内 容	出典・提供
No 1	絵図 菅江真澄像	奥民図彙 発行 青森県立図書館
No 2	絵図 囲炉裏	菅江真澄全集 発行株式会社未来社
No 3	絵図 長谷澤不動尊周辺	菅江真澄全集 発行株式会社未来社
No 4	絵図 題目石	菅江真澄全集 発行株式会社未来社
No 5	写真 題目石	黒石市大観 黒石市大観発行委員会
No 6	絵図 鹿頭を刻んだ岩1	菅江真澄全集 発行株式会社未来社
No 7	絵図 鹿頭を刻んだ岩2	菅江真澄全集 発行株式会社未来社
No 8	写真 上十川児童獅子踊	黒石市立上十川小学校提供
No 9	映像 上十川児童獅子踊	黒石市上十川公民館提供
No 10	絵図 蛾虫峠から見た中野村・黒森村—山形岳泉画	黒石市史 勝地浅瀬石川 発行 黒石市大観発行委員会
No 11	絵図 力ッコロの絵図	奥民図彙 発行 青森県立図書館
No 12	絵図 蛾虫峠から見た板留村—山形岳泉画	丹羽洋岳像 丹羽洋岳像 発行 丹羽小一郎
No 13	写真 板留温泉	黒石市大観 黒石市大観発行委員会
No 14	写真 黒石市大観	黒石市大観 発行 黒石市大観発行委員会
No 15	写真 黒石市大観	黒石市大観 発行 黒石市大観発行委員会

◇ 参考にした本や資料

しきよう

黒石市史	黒石市	発行	昭和六十二年
民俗芸能伝承の周辺	青森県教育委員会	発行	平成十三年三月
黒石市略年表	黒石市	発行	昭和四〇年八月
上十川獅子踊活動資料	黒石市上十川獅子踊保存会	提供	黒石市上十川獅子踊保存会
黒石市の文化財	黒石市教育委員会	発行	平成十七年三月
津軽黄檗禪刹記	薬師禪寺	発行	昭和六十年十二月
南津軽郡是	青森県南津軽郡役所	発行	昭和五十年六月
奥民図彙	青森県立図書館	発行	昭和四十八年
黒石百年史	黒石市役所	発行	昭和三十七年五月
菅江真澄全集	株式会社未来社	発行	昭和四十三年十二月
寺院縁起誌	青森教区弘南組	発行	昭和五十年十一月
浅瀬石川郷土志	神良治郎 陸奥郷土会	発行	昭和六年十月
津軽道中譚	青森県文化財保護協会	発行	昭和三十一年九月
角川日本地名大辞典	株式会社角川書店	発行	昭和六十年十二月
青森県の民俗芸能	青森県教育委員会	発行	昭和六十一年三月
青森県民俗芸能報告書	青森県教育委員会	発行	平成八年三月

◇ **編集・執筆・調査・製作の後援**

☆ 民俗芸能——二双子「だげぐら」の調査 黒石市教育委員会文化課

・一次調査——平成十九年八月二日

文化課

課長 三浦 裕寛

主幹 盛 修一

係長 鈴木 徹

・二次調査——平成二十一年七月三十日

文化課

課長 須藤 善久

歴史文化専門員

三上 英治

歴史文化専門員

三上 英治

☆ 「私たちのくろいし」表紙の題字

—— 黒石市民財團理事長

佐藤 義弘

☆ 表紙や文中の「切り絵・略地図」

須藤 重昭

八章(一)(二)の執筆

安部 誠

☆ 全体の編集と内容の執筆・八章(一)(二)の補訂

三上 英治

◇ 製作の後援

黒石市教育委員会

ふる里読本 「わたしたちの黒石」

第 四 集

「昔 記録されている地域の様子や伝承・史跡」

編集・執筆

三 上 英 治

発行 平成二十二年二月一日

發 行 者 財団法人 黒石市民財団

佐藤義弘

事務局

青森県黒石市大字市ノ町五番地二号

黒石市産業会館内

電話 ○一七二（五三）〇一五六

對馬省次

株式会社 津軽新報社

青森県黒石市前町四十八番地

電話 ○一七二（五二）三一九一



財團法人 黑石市民財團